

「ほっと café 玉縄台」 ～オープンから1年過ぎて

閑静な住宅街の一角にある玉縄台自治会館。近づくにつれ楽しげな声が聞こえてきた。8月は「納涼ほっと café」。時間も普段より遅い午後3時から。おいしい料理の他にビールも用意された。夏の終わりの夕涼み。地域の人たちが気軽に集まり語り合う和やかな時間だ。

毎月最終日曜日に開かれる「ほっと café 玉縄台」。昨年5月のオープンから毎回様々なイベントを企画してきた。ピアノ奏者を招いて催された歌う会、たくさん子どもたちが参加したクリスマスパーティー、専門家による講演会も地球温暖化やドイツビール、フランス文化についてなど多様なテーマで毎回好評だ。今後も年内は既に予定がいっぱい。



はじめての講演会「広島原爆投下のあと」はメンバーのひとりが地域活動中に交わした会話がきっかけ。自分ひとりが聞くにはあまりにももったいないと企画した。その後も環境問題や海外の文化についてなど、在住の専門家が次々と招きに応じてくれている。写真はここ最近の企画ポスター。

「いつもどこかから声がかかるんです。こんなことやりたい、こんな人がいるよって。私たちは場所をつくるだけ。何でもどうぞって。」

世話役で店長を務める柳瀬禎子さんはそう語る。それでも事前の会議に始まり、ポスターやチラシの作成から掲示、回覧、当日は喫茶軽食を準備し参加者を迎え、終了後は報告の記事や次回の予定を掲載した「ほっと café 通信」も作成している。なかなか簡単にできることではない。

「すごいんですよ人材豊富で。お料理はあちらの皆さんが何から何まで。講演の企画はこちらの方がいろんなお話をご存じで。写真撮影はあちらの…、通信の編集は…」約15名の運営会議メンバーが、それぞれ得意な分野を受け持ってくれているのだという。次第ににぎやかになる会場で、誰もが自然な様子でそれぞれの役割をこなしている。皆ができることを少しずつ。大変になってしまわないことが大事だという。理想的な地域活動の在り方だと思う。



福祉給食サービスの経験者やアジア料理店のオーナーら、頼もしいメンバーが腕を奮った特別メニュー。開場を前に準備万端。

7、8年前、柳瀬さんたち数名は、近くにグループホーム建設の計画が持ち上がったことをきっかけに住民アンケートを行った。老後の生活について「玉縄台を出て施設に入る」という選択を望む人が半数を超えたことに衝撃を受ける。できるだけ元気でここで暮らしたいと考える人は少なかった。玉縄台は昭和42年ごろから開発された住宅地だ。働き盛りにマイホームを構えた人たちが定年を迎え始めた時期だった。地域交流の必要性を痛感した。「地域の福祉を考える会」を立ち上げた柳瀬さんたちは、勉強

会やイベントを行い、少しずつ関心の輪を広げていく。広報は自分たちの手で各戸にポスティングした。様々な形の地域交流を重ね、昨年5月、自治会の協力を得て「ほっと café 玉縄台」がついにオープンした。

日が傾くにつれ訪れる人が増えてきた。いらっしやい、どうぞどうぞと明るい声が迎えてくれる。皆慣れた様子で席に着き、顔見知りを見つけては話に花を咲かせる。男性が多く集まるテーブルは伐採作業のグループで、今日はこの場で結成式をするのだという。できたばかりの合唱団について語り合う人、小さな子どもたちもやってきた。入口のテーブルにたっぷり用意されたおいしそうな料理が次々に手に取られていく。こうして月1回でも顔を合わせるうちに芽生えるものがある。散歩の途中にコーヒー1杯飲みに来る人、街頭の掲示を見て初めて訪れる人。通り一本隔てただけで自治会館の場所さえ知らなかった人も通ってくれるようになった。時間をかけて培われてきた地域のつながりが実を結び始めていることを感じた。



手に取りやすい串ものからソーセージ、よく煮えたおでん、サラダやデザートまで。目にも鮮やかな料理の数々。

「今後はどんどん若い人たちにも参加してほしい。どんなことをしたら来てくれるのか、どんなことを考えているのか。」

640世帯を抱える玉縄台。住民の多くが65歳以上だ。それでも一時落ち込んだ子どもの数は徐々に増えてきている。既に子供会との関わりを増やし、保護者の意見や要望を吸い上げているところだ。自然なコミュニケーションの中で浮かび上がるものこそ一番必要とされていることなのかもしれない。会って言葉を交わすこと。それがどれだけ人を地域を変えてきたかを目の当たりにした。



入ってすぐのテーブルに飾られた花はメンバーが自宅の庭に咲いたものをアレンジ。季節らしい摘みたての花々が毎回会場を彩っている。



受付にて。飲食はここでチケットを購入する方式。人件費は出ないが赤字にならない運営を心掛けている。続けていくために大事なことだ。左は「店長」柳瀬さん。